



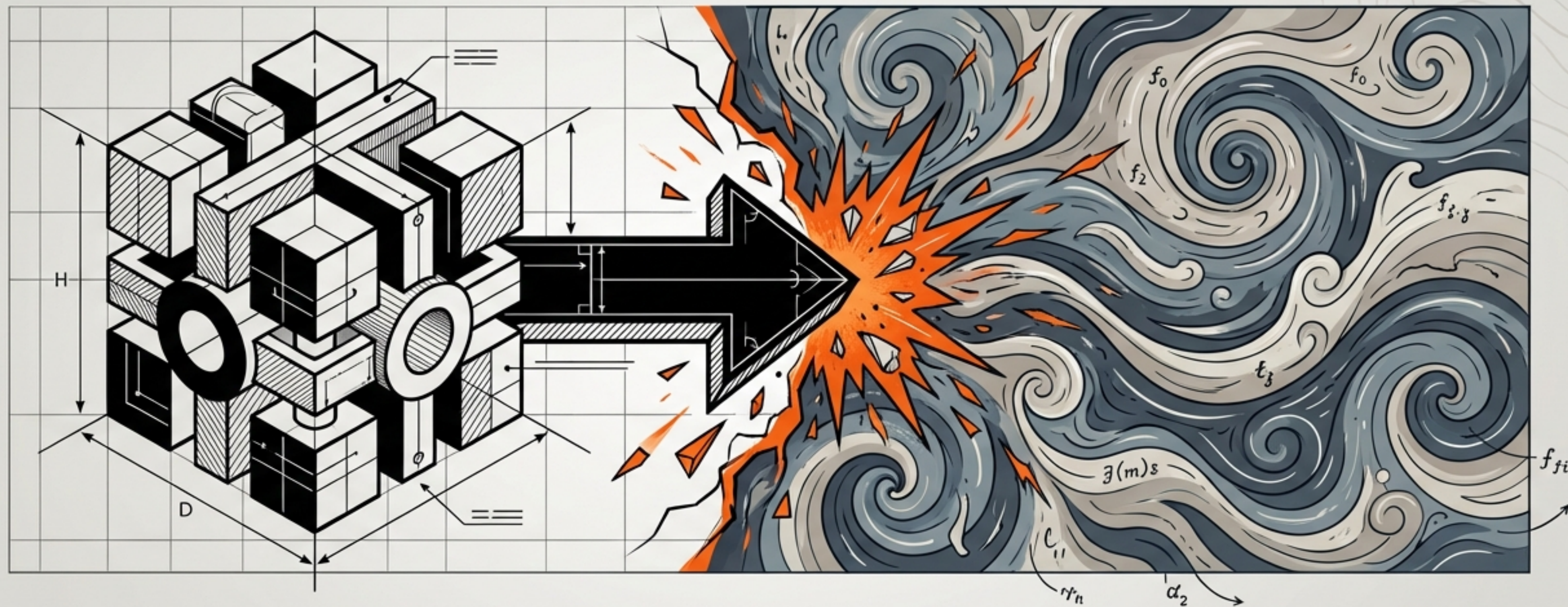
構造感受性の閾値

人はなぜ、最も整合性の高い「構造」を情緒的に拒否するのか

完璧な論理が、最も激しい拒絶を生むというパラドックス

完璧な論理 (提案)

情緒的拒絶 (現場)



最適で一貫した設計や制度は、
しばしば現場の激しい反発に遭う。

情報が不足している
からではない。

提案の「正しさ」そのものが、
摩擦の火種となっている。

拒絶は「無理解」ではなく「防衛」である

Mindset Shift

旧パラダイム

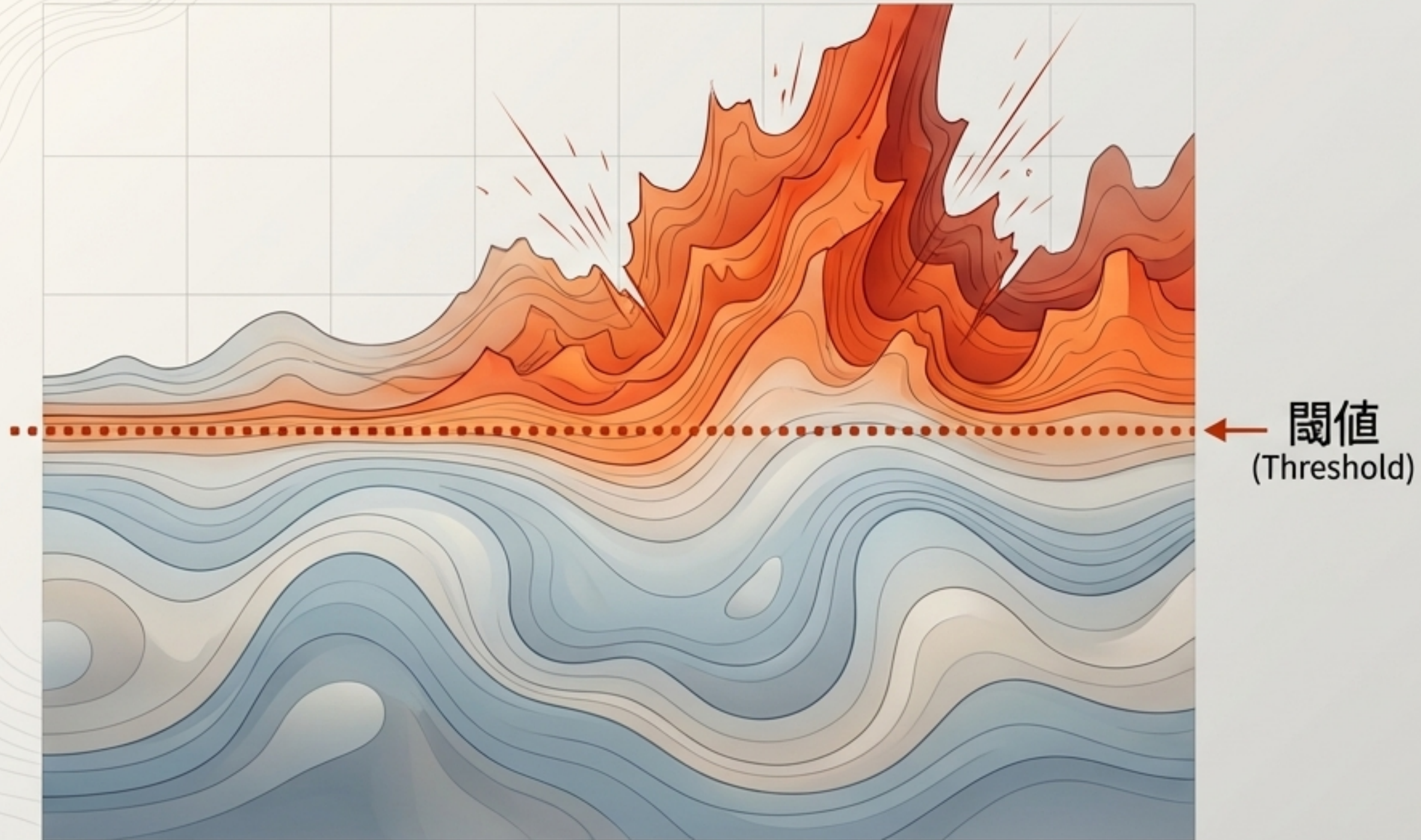
相手が論理を理解できないから拒否する（能力・気分の問題）。

新パラダイム

現在の安定状態（心理的均衡・役割の利得）が崩れる予感に対する、心身の自然な防衛反応である。

人は“正しい構造”を拒否するのではない。自分の世界の崩落を拒否するのだ。

構造感受性の閾値 (Structural Sensitivity Threshold)



高次の構造（因果の束ね直し、役割再配分、時間倫理）に対して、個人や組織がどの程度の「照応と受容」を示せるかの尺度。

この閾値を越えた瞬間、論理の劣位ではなく、生活上の安定を守るための「防衛」が発動する。

閾値突破が引き起こす「二重の負荷」



1. 新たな整合構造の提示

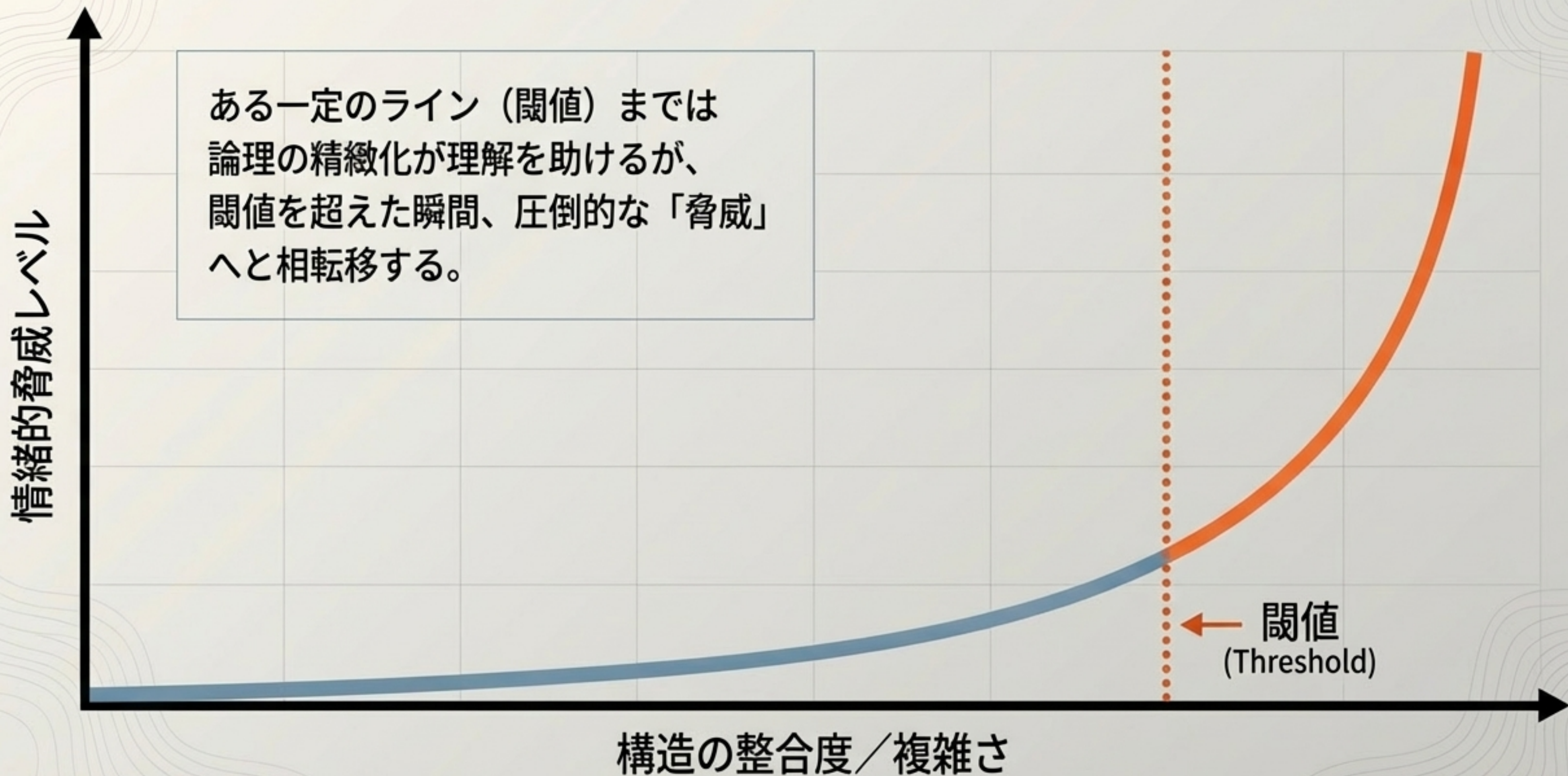
2. 既存スキーマの揺らぎ

Path A: 脅威認知の活性化 (扁桃体) - 安定の地盤沈下
Path B: 認知資源の消耗 (前頭葉) - 学習・再説明のコスト急増

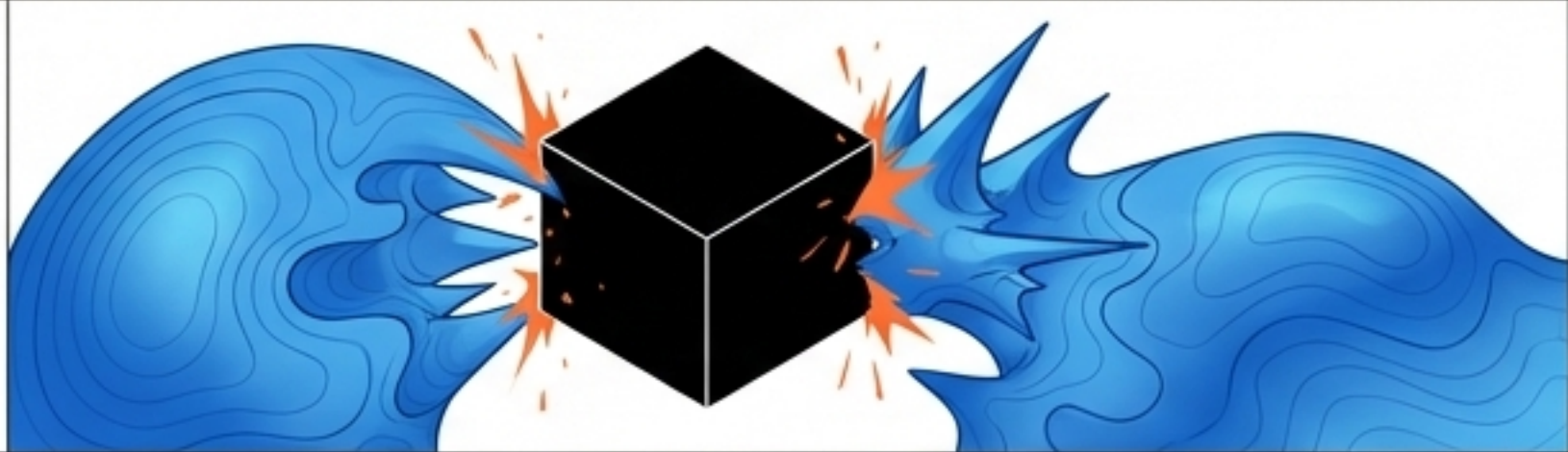

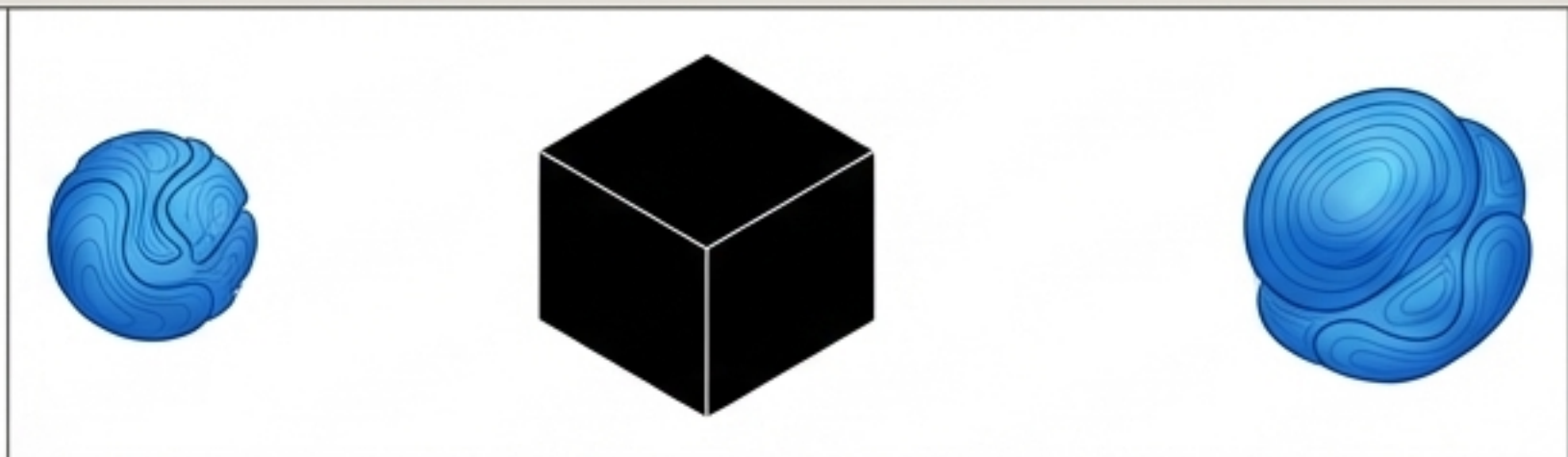
4. 防衛的拒絶

可視の利益が届く前に、不可視の負担（脅威と認知コスト）が
閾値を超えるため、拒否が自然化する。

整合性の高さ と 脅威レベルの非線形な関係



閾値を超えた際に現れる「3つの防衛反応」

脅威化		提案が「改善」ではなく「否定」として知覚される。
反転		構造の論点から離れ、動機や人格への個人攻撃にすり替わる。
収縮		新たな役割分布に触れず、既得の慣行へ回帰・沈黙する。

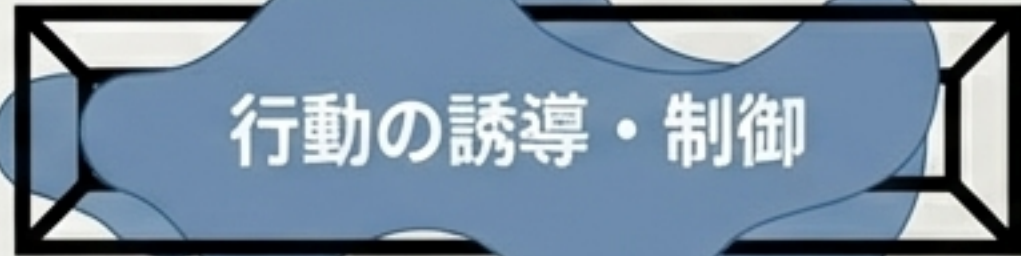
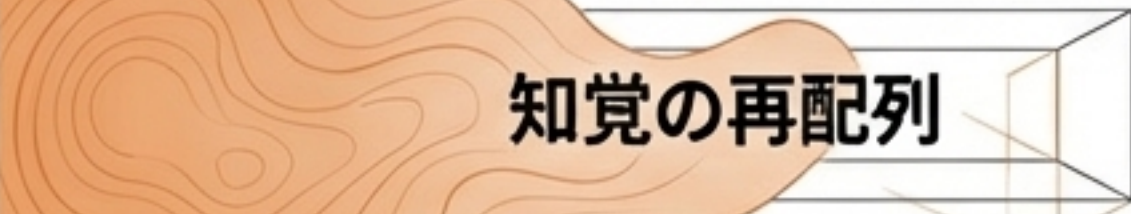
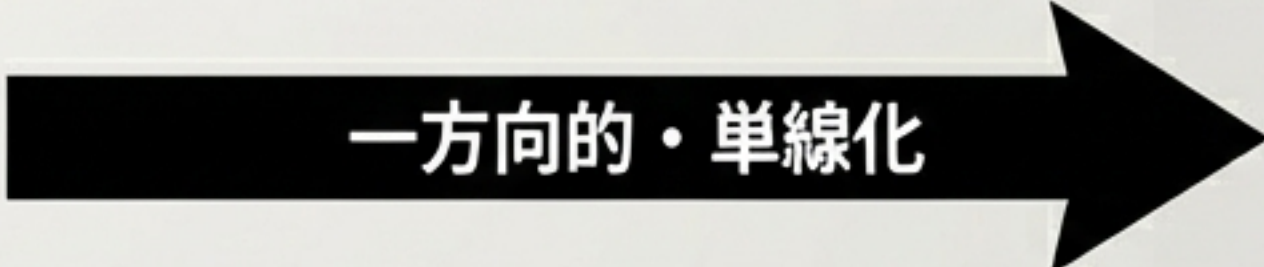





なぜ「説得」は破壊的なのか



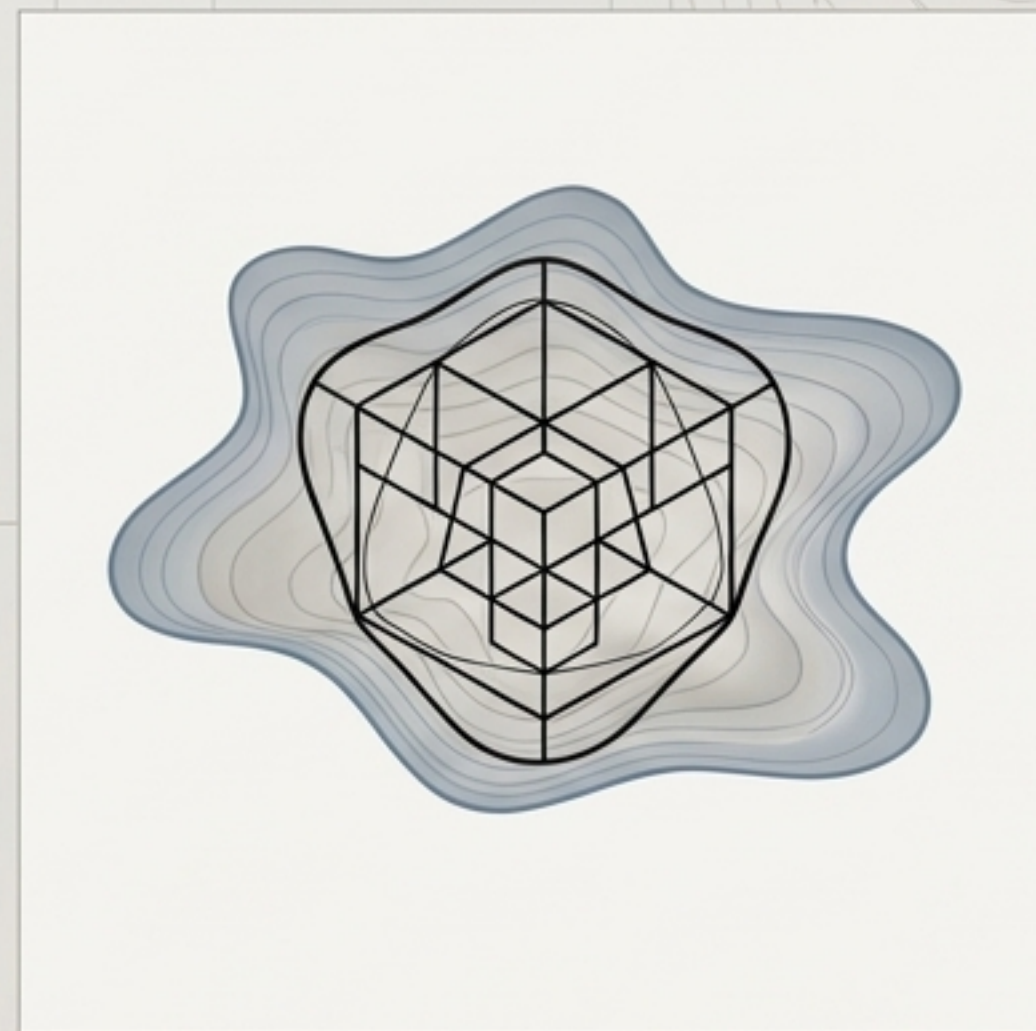
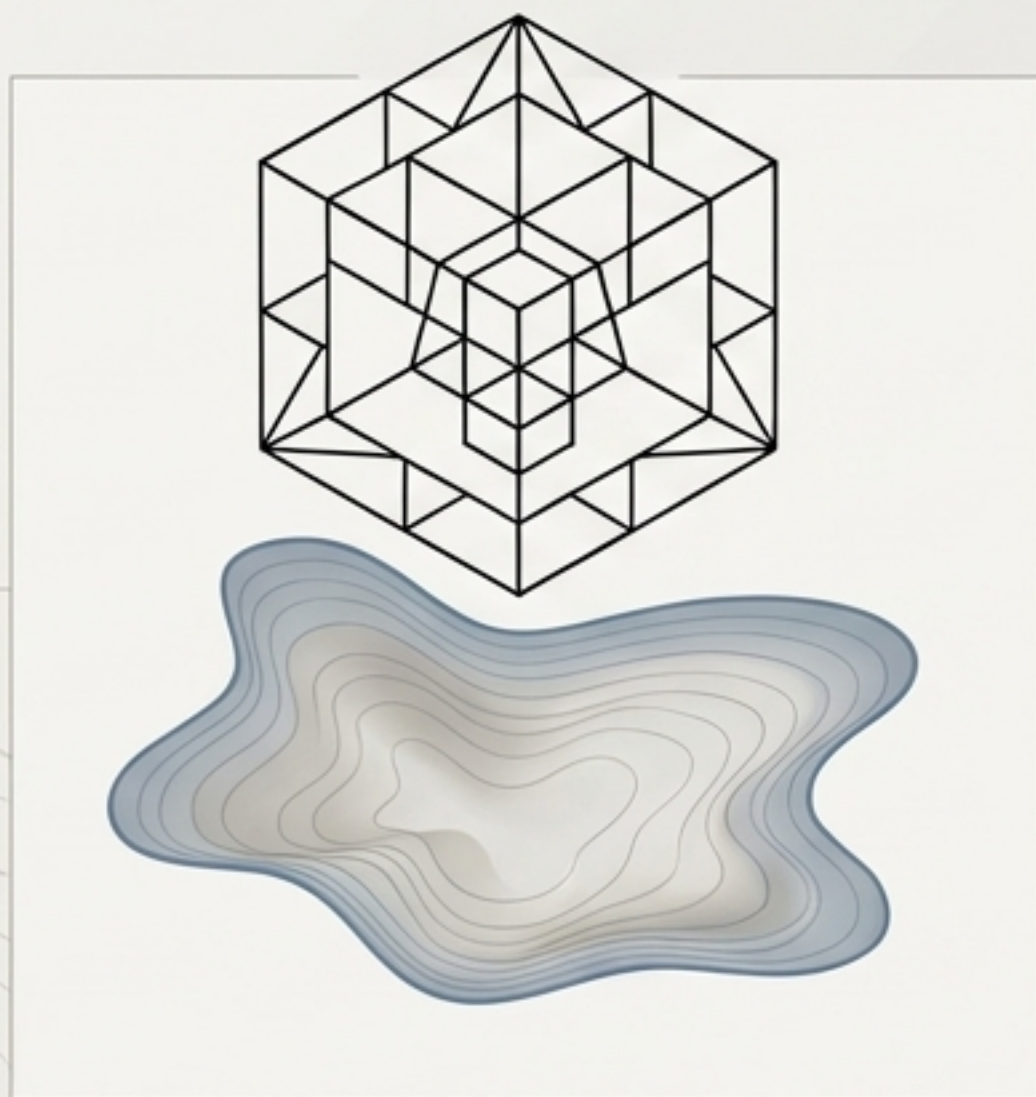
説得

- **単線化された合意:** 相手の多線的な文脈を削ぎ落とし、「Yes/No」の二択へ押し込む行動制御。
- **可逆性の喪失:** 「一度Yesと言わせたら勝ち」という不可逆な圧力が、防衛本能をさらに刺激する。
- **同調の強制:** 理解ではなく、心理的・権力的な同調を優先するため、長期的な「照応」が崩壊する。

コミュニケーションのパラダイムシフト

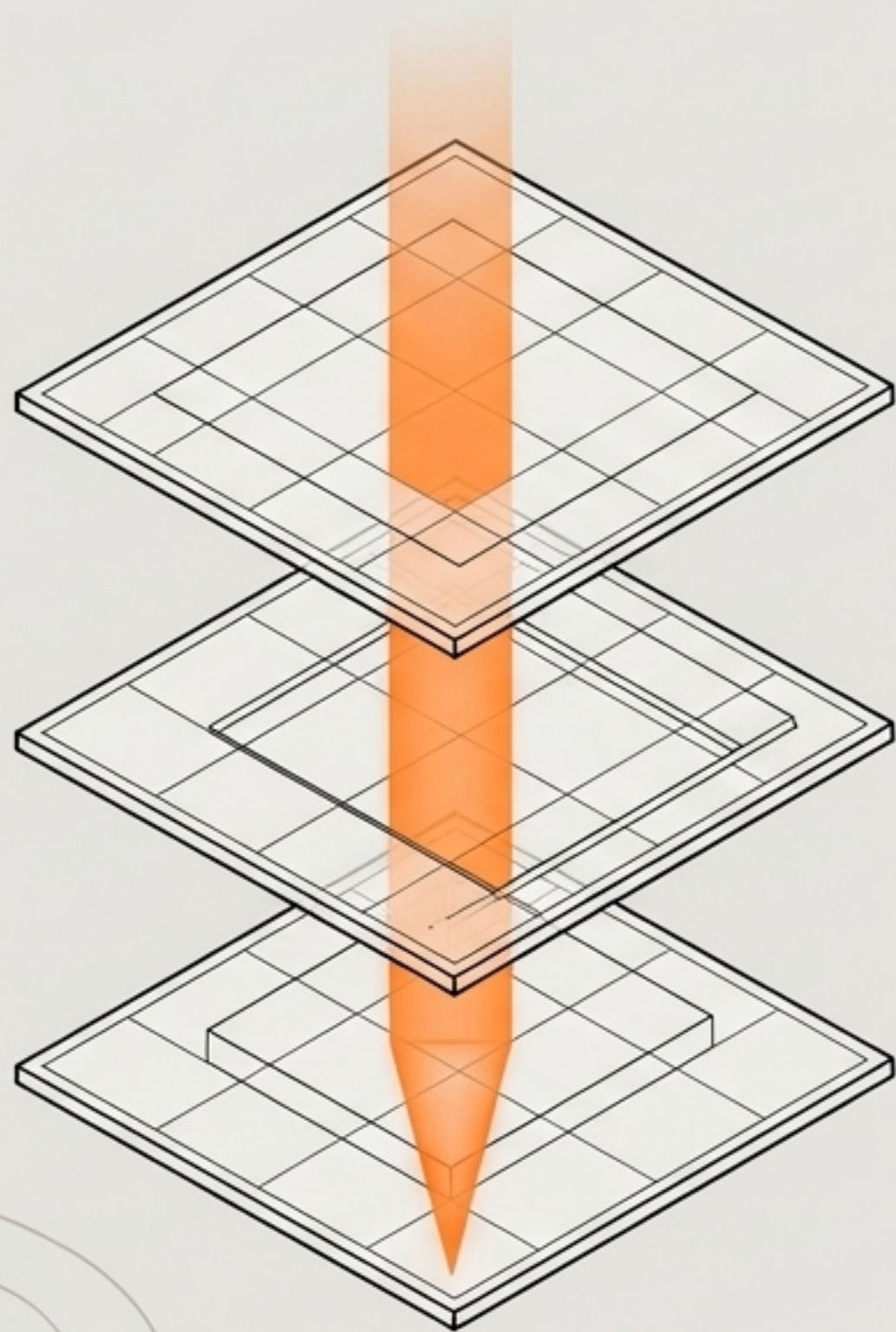
	説得 (Persuasion)	照応 (Resonance)
目的	 <p>行動の誘導・制御</p>	 <p>知覚の再配列</p>
方向性	 <p>一方向的・単線化</p>	 <p>双方向的・位相接合</p>
時間軸	 <p>即時の「Yes」の要求</p>	 <p>熟成と周期（拍）の許容</p>
安全性	 <p>戻れない合意（不可逆）</p>	 <p>再署名・再構築が可能（可逆性）</p>

照応知覚論：知覚トポロジーの設計



- 理解とは「他者を納得させること」ではない。「自他の構造が安全に連結され、可逆に移動できる道筋が生まれること」である。
- 受け手の認知フレームに合わせて、構造の“形（トポロジー）”を調整し、摩擦なく受容される空間を設計する。

摩擦を最小化する「三層の翻訳モデル」



1. 制度 (Institution)

– 役割・配分責任の枠組み。

2. 映像 (Image)

– 構図と情動の整合。

3. 言語 (Language)

– 語彙の位相調整（専門語は骨格のみ、周縁語で手掛かりを作る）。

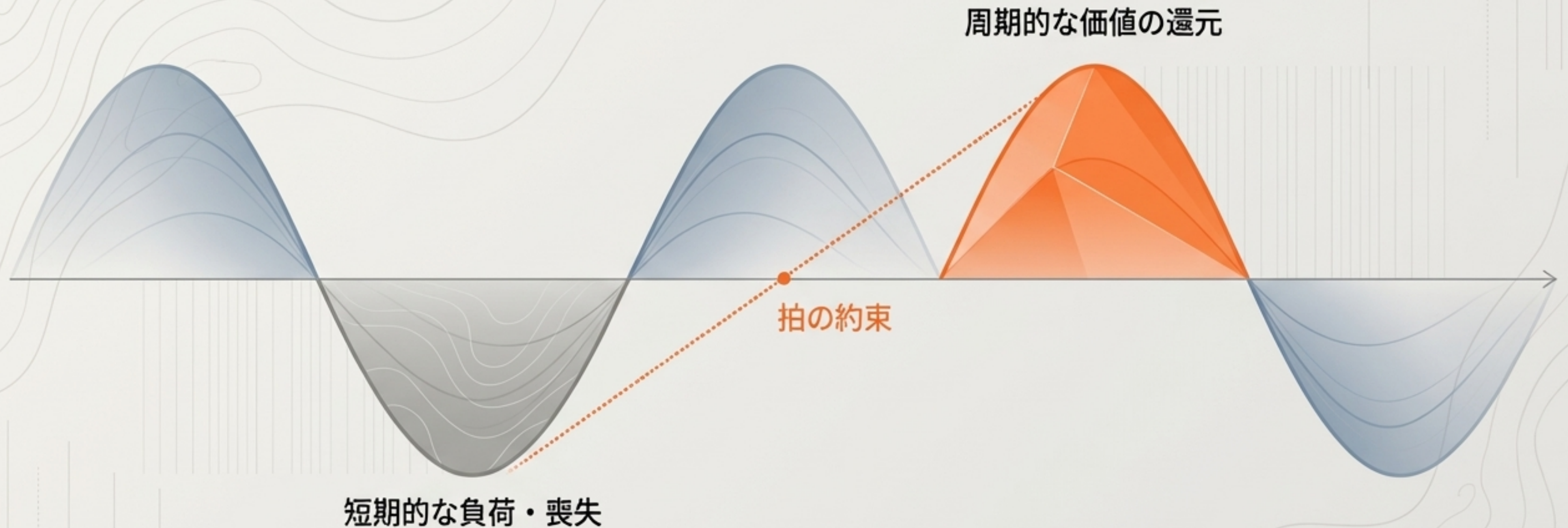
介入を最小化し、
情報を加えるのではなく
「どれだけ余白を残せるか」
が翻訳の倫理である。

実装原則 ① 照応の即時可視化



- 全体像の壮大さを語る前に、「あなたはどこにいて、どう助かるのか」という局所的な照応を先に示す。
- 大きな主語（社会・会社）から語ることは、個人の不安を刺激する。「私」の生存領域が確保されていることを図解し、防衛本能を解除する。

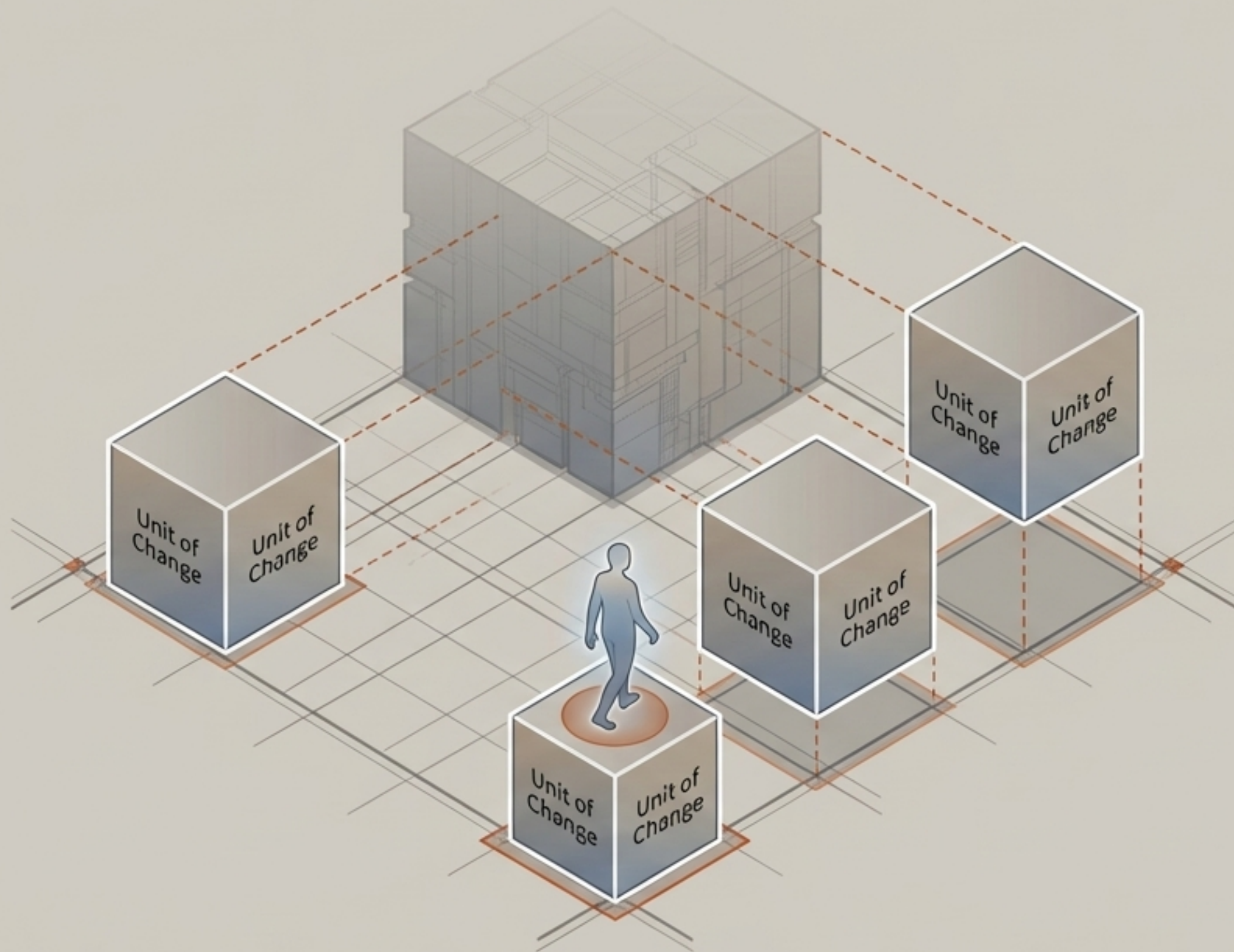
実装原則 ② 拍の先出し（時間的整合）



Point 1 「いまは損をするが、拍（リズム）で必ず取り戻す」という時間的整合を明示する。

Point 2 未来の回収周期（評価・見直し・還元）を事前に約束することで、拒否は単なる反発から「条件付き保留」へと転換する。

実装原則 ③ 役割の分割提示 (Unit of Change)

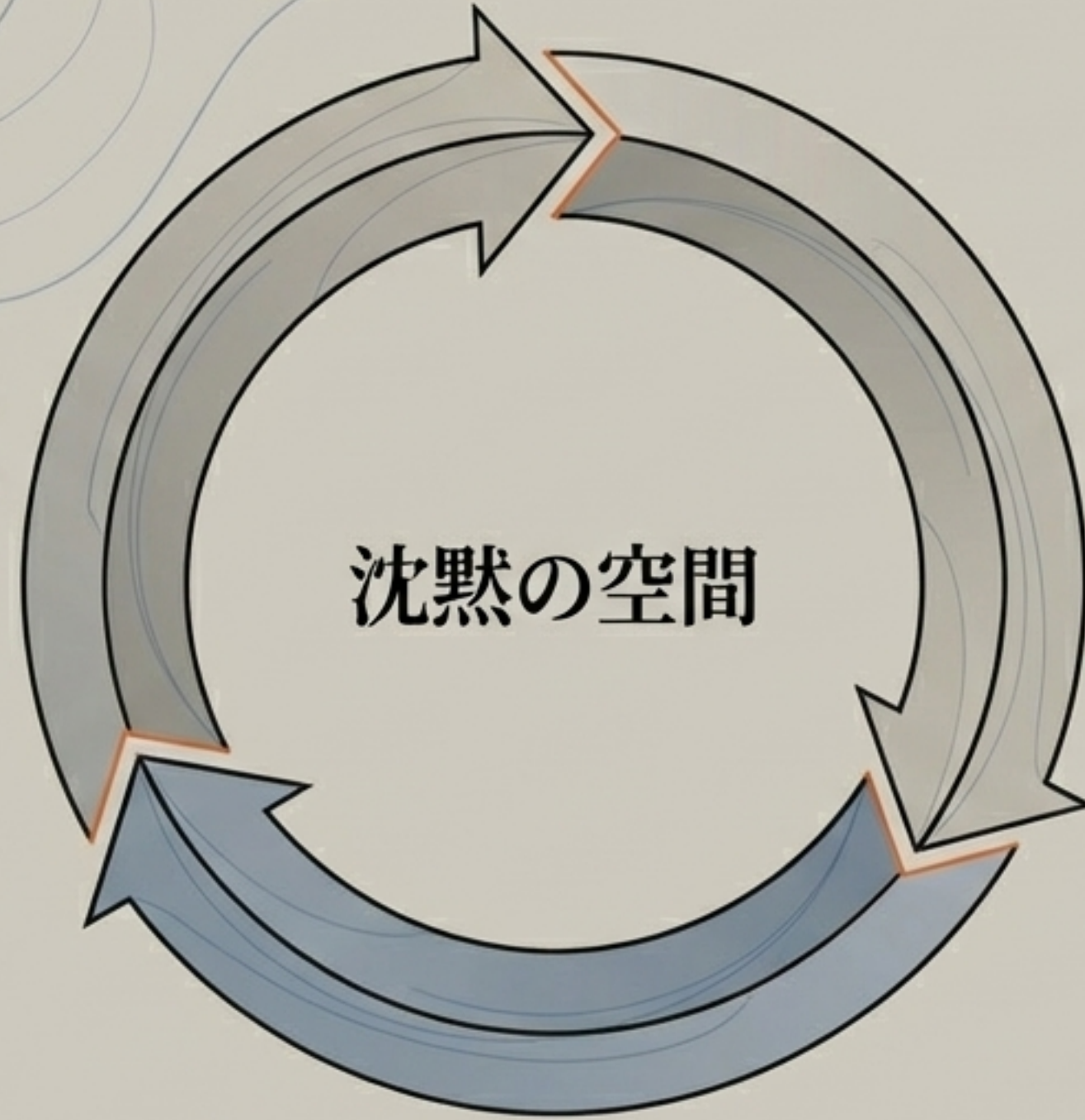


巨大な再配列を一度に要求せず、最小可動部分 (Unit of Change) を切り出して段階的に提示する。

不安定化の期間を見積もり、代替手当 (支援窓口) と「感情の行き場」を確保する。行き場のない構造は必ず拒絶される。

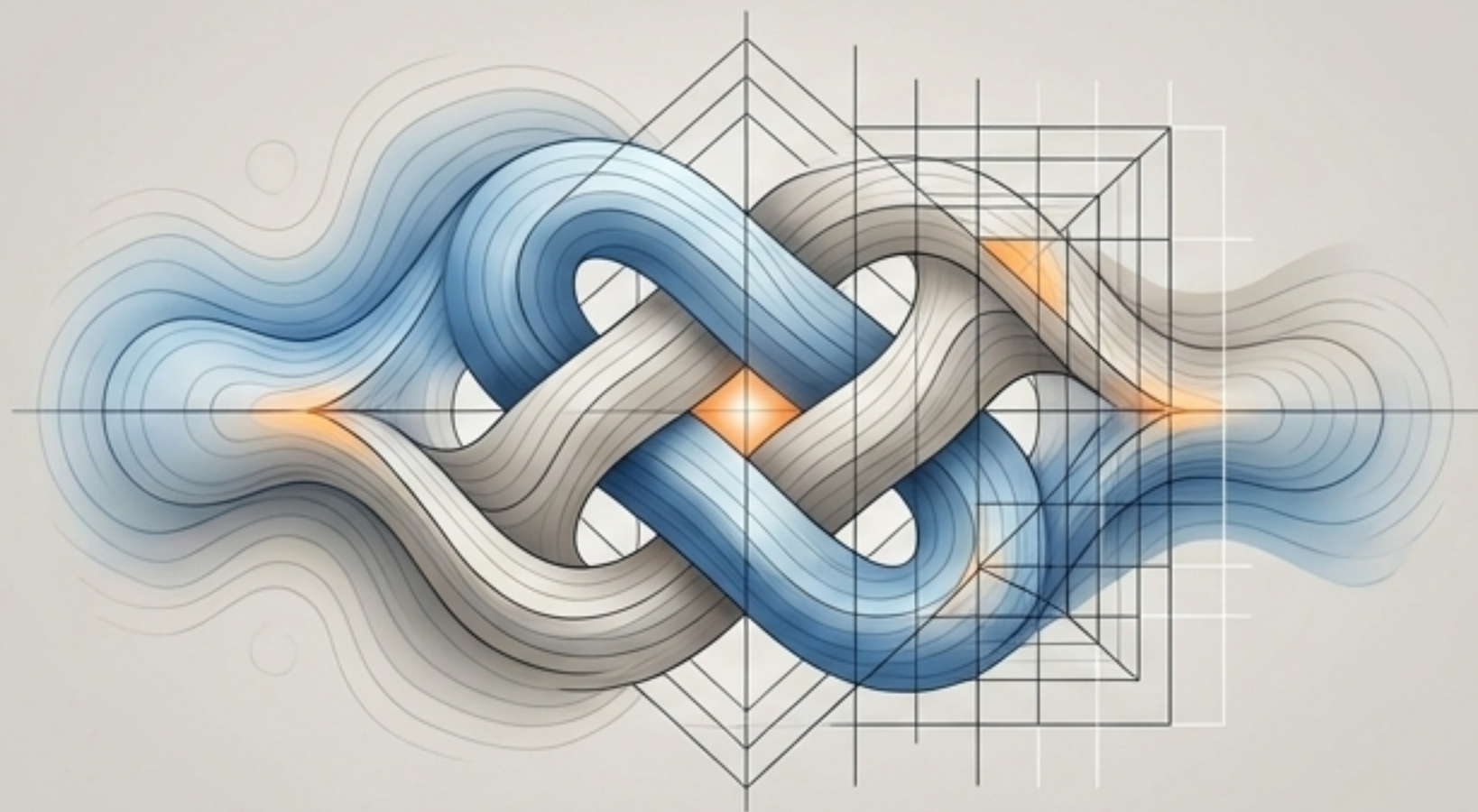
最小介入の運用リズム：「見せる・待つ・戻れる」

戻れる
可逆な足場（再合意・再設計）
を常備する。



見せる
因果の骨格を隠さず、
しかし“すべて”は見せない。

待つ
余白を確保し、受け手自身の再配列を促す。



構造保持者の倫理：必然を編纂する「非強制」

構造は、強いることで広がらない。戻れる道と、待つ時間と、見える骨格がある場所にだけ、長期の照応は育つ。

「正しさ」を感情の犠牲の上に成り立たせるのではなく、論理が情緒のリズムで呼吸できる空間を設計する。

それこそが、摩擦なく世界を変容させる「構造的無為自然」の到達点である。